

国

語

(
解答番号

1

5

38

)

第1問 次の「文章Ⅰ」は、漫画家手塚治虫(一九二八—一九八九)が描いたキャラクターの特徴について述べたものであり、

「文章Ⅱ」は、(キャラ)を理論的に考察したものである。これらを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。(配点 50)

「文章Ⅰ」

手塚のまんが記号説とは自身によって以下のように説明される。

「たとえばね、僕の描く女が無機質だとか、色気がないとか、マネキンみたいだとかいろいろ言われるんだけど、僕ね、最近ふと思いついたんだけど、どうも僕自身あまり画を描こうとしてるんじゃないと思うの。僕は大体、もともと画が本職じゃないしね、デッサンなんかもやったことないし、まったく自己流の画でしょ。だから、それは表現の手段としてね、たまたまお話をつくる道具として画らしきものは描いていますけど、僕にとってあれは画じゃないんじゃないかと、本当に最近思いだしたんです。

じゃあ何かっていうとね、象形文字みたいなものじゃないかと思う。僕の画っていうのは、驚くと目がまるくなるし、怒ると必ずヒゲオヤジみたいに目のところにシワが寄るし、顔がとびだすし。(笑)

そう、パターンがあるのね。つまり、ひとつの記号なんだと思う。で、このパターンとこのパターンとこのパターンを組み合わせてると、ひとつのまとまった画らしきものができる。その組み合わせのパターンっていうのは、僕の頭のなかに何百通りあってあるわけです。だけどそれはジュン(ア)スイの絵画じゃなくてね、非常に省略しきったひとつの記号なのだと思う。」

(手塚治虫インタビュー「珈琲と紅茶で深夜まで…」、『ぼふ』79年10月号)

図1はインタビューよりさらに十年前、まんがの技術論として手塚が上梓した『まんが専科 初級編』に収録されたものだが、手塚はここで図らずも自らの記号的表現を一覧表化している。人間の感情という領域を手塚はパターン化した表情に還元す

る。あらかじめこのような「記号」が存在し、そこにまた別の「記号」である男女や民族、年齢等を示すパターンが任意に組み合わせられて、一人の人間が表現される。しかし、表現された一人の人間はその感情も含めて記号の集積に還元されてしまう。つまり、**A** そこでは一人の人間の個性はけっして存在しえないのである。

〈キャラクターにしてもそうだと思うんですよ。僕の作品にはいろんなキャラがでてくるようにだけ、あれはみんなパターン化しちゃってるんですよ。悪いキャラとか、細長いキャラとか、目の大きいキャラとか。美人とか美男子なんてみんな同じ顔になってしまふ。ただ髪だけが違ってね。その髪形もよく見れば別のキャラからとってきたものだったり。だから、キャラクターっていうのは僕にとって単語なんですね。〉

(手塚、前掲インタビュー)

このインタビューのテーマは当初、掲載誌の手塚まんがのキャラクター特集に合わせて試みられたものである。しかし手塚は、インタビューのキャラクターへの思い入れを拒絶するかのようになり、このまんが記号説を語ったのである。このキャラクター、すなわちまんがの図像に対して読者が「意味」を見出^{みいだ}そうとしたことを手塚が拒否した、というまんが記号説が語られた文脈は重要な意味を持っているので、注意を喚起しておきたい。

それでは手塚にとってまんが表現における「絵」とは何かといえ、それは「お話をつくる道具」、つまり、「言語」であるという。しかし、手塚のまんが記号説において重要なのは、その「言語」を手塚は徹底して意味を廃した人工的なものとみなしている点である。

〈たとえば、^(注2) エスペラント語という、これはまったく理想化された国際言語形態があるでしょ。これにはなんら、もともとの意味づけがないわけです。でも言語っていうのはもともと、英語にせよフランス語にせよラテン語にせよ、発生から意味はあったと思うんです。〉

(手塚、前掲インタビュー)

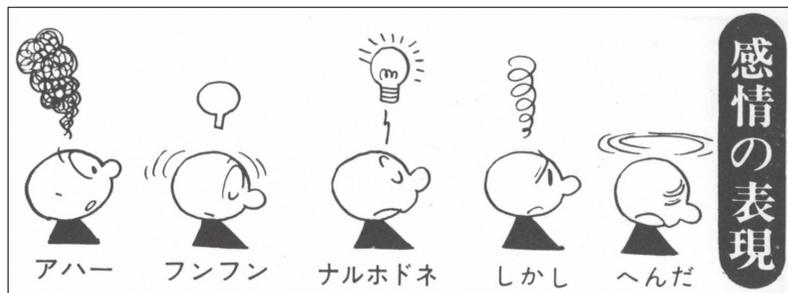


図 1

手塚はここで、まんが的記号における言霊ことだま的な根拠とでもいうべきものを否定しているのである。全く任意の記号として彼はまんが的記号を定義している。そもそもことばには「もとになる意味づけ」があり、それは歴史的文化的な所産である。だからこそことばはナショナルなものよの依り所になりうるのである。こういったことばの喚起する歴史的なイマジネーションを仮に言葉と形容するなら、手塚はいつさいそれを廃した人工言語として自らのまんが表現を規定しているのである。

確かにまんが表現における「記号」性は文化や民族による意味付けに思いのほか、(イ) ゴウソクされていない。それは日本独自のものと信じて疑わなかった戦後まんがの汎世界化(注3)によって図らずも証明された形となった。無論、まんが記号の汎世界化はアメリカニズムの汎世界化にすぎない、という見解をほくは否定しない。だが少なくともまんが表現が手塚によって文化的な固有性を拒絶した国際語としてあらかじめ意識されていたことは重要である。このことはジャパニメーション(注4)の国際的評価の高まりを日本文化の世界化と単純に見なすおたく文化とナシヨナリズムの結託に対する一定の批判となっているのは言うまでもない。まんが記号は非「日本語」として手塚にはあったことは見逃すべきではない。 **B** 〔記号〕として設計されたことと、汎世界化は不可分の関係として手塚は理解していたのである。

このように手塚まんがの表現とは「ことば」としての歴史性を放棄した言語としてあらかじめあった。こういったまんが記号の人工性は同時に作者の特権性の放棄を意味する。手塚は自らの表現における個性をまず「記号」という無個性な言語に還元することで、自らの特権性を放棄してみせたのである。

(大塚英志『江藤淳と少女フェミニズムの戦後』による)

【文章Ⅱ】

八〇年代に(ウ)リユウセイを迎えたロゴの特徴は、ひとことと言えば、アルファベットを中心とした文字要素の洗練による(注5)VIの確立であり、それは、ヨーロッパの伝統的ブランドのロゴを多分に意識したものであった。その使命は、シェアの拡大を目指すなかで、横並びの同業種に対して、差異を記すことであった。それは、この時代の記号論や消費社会論が提出した、記号の価値がモノの価値に優先するという主張を端的に証明するものであった。

しかし、(キヤラ)は、モノとの関係を断ち切り、それとしての自立性を獲得する。(キヤラ)は、それを作成した企業や、あるいは、それが登場する作品とは、無関係に独自の発展を遂げるのである。

また、形態の上でも、ロゴがアルファベットを中心とした文字要素の洗練化によって特徴づけられるのに対して、(キヤラ)は、人称化(注6)ヒト化した形象である。そして、(キヤラ)を、すぐれてコミュニケーションのvector(注6)としているのは、このようなヒト化(注6)人称化の力であり、それは、(キヤラ)が「指標的」対象だということである。

この点を明らかにするのが、コミュニケーションの哲学者、ダニエル・ブーニユーの提案する「記号のピラミッド」(図2)、そして、「指標的コミュニケーション」(注7)の概念である。記号のピラミッドは、ブーニユーらがテイ(エ)シヨウするメテリオロジーの基礎をなすものであり、(注8)パースが定式化した象徴／類像／指標という記号の三分類を、コミュニケーション論・メディア論の基礎理論とすべく更新するものである。このピラミッドの基層には、「接触(contact)」によって規定される指標の次元があり、人間のコミュニケーション活動やメディアの活動を下支えしている。それに対して、最上層には、社会的に確立された規約

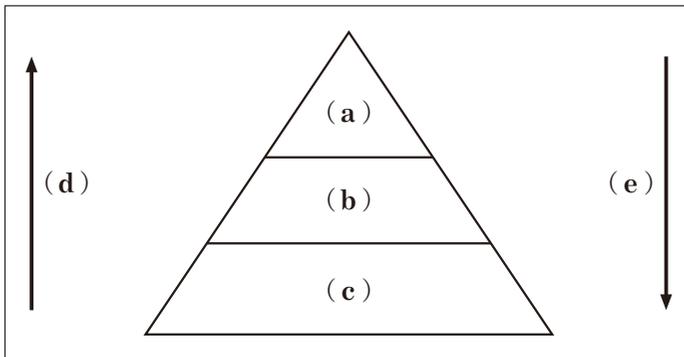


図 2

によって規定され、言語、特に文字を典型とする象徴の次元がある。そして、これらの中間に、イメージの次元である類像の次元があり、一方では、象徴記号のように、直接的、一回的なものである接触関係から離脱し、「いまここ」を超えて理解されるが、他方では、いまだ指標記号のように、直接的で直観的な強い訴求力を保持している。そして、この記号のピラミッドが、下から、指標／類像／象徴の順で並べられているのは、個体の成長、文化の進展が、その都度、確立される一回的な文脈に埋め込まれた、直接的な接触関係から、イメージの獲得を経て、コードが共有されている限り、いつでもどこでも、脱文脈的に理解される言語、文字の次元へと進んでいくことに応じたものである。これに対して、複製技術としてのメディアは、文字の複製としての印刷術から、写真や映画といった一九世紀的なイメージの複製から、「いまここ」の出来事を構成するテレビを経て、一回的なものを複製する二一世紀的なデジタル技術へと変遷してきたわけだが、この変遷は、このピラミッドに従えば、個体や文化の場合とはちょうど逆の方向で進んできたのが明らかになる。

この記号のピラミッドに位置づけるなら、ロゴにしろ、〈キャラ〉にしろ、VIは、イメージとして、類像の次元に属するものである。しかし、ブランド名を表す、アルファベットの文字要素を洗練化したVIが、象徴の次元に接し、それを担保としているのに対して、**C**〈キャラ〉は、そのような担保から切り離され、指標記号のレベルに接近したものである。

この点を明瞭に表しているのは、キャラが〈顔〉の対象だということである。認知心理学や発達心理学が明らかにしているように、われわれ人間は〈顔〉に対して、認知的親和性を持つている。誕生直後の赤ん坊も〈顔〉的な対象に対して、特別な関心を示すだけでなく、その表情を模倣しもする。このような親和性は、大人でも維持され、たとえば、曇りや^(オ)ハクメイなど、認知に^(注9)とつての悪条件下では、〈顔〉以外の対象であっても、〈顔〉として認識してしまう(心霊現象、あるいは、いわゆるシミュクラ現象を想起しよう)。このようにわれわれの視線を引きつけずにはいられない〈顔〉とは、^(注10)「交話的(Diatic)」イメージであり、その意味で、すぐれて指標の対象である。

(西兼志「^(注11)コミュニケーションのvectorとしての〈キャラ〉——indivisualコミュニケーションによる」)

(注)

- 1 ヒゲオヤジ——手塚治虫の漫画にしばしば登場する人物。
- 2 エスベラント語——一八八七年にザメンホフ(二八五九—一九一七)によって公表された人工の国際語。
- 3 汎世界化——世界に広く行き渡ること。
- 4 ジャパニメーション——ジャパンとアニメーションの合成語。日本製アニメーション。
- 5 VI——ヴィジュアル・アイデンティティ。視覚的記号。
- 6 vector——(この)では媒介するものの意。
- 7 メディオロジー——メディアの機能に着目して伝達作用を研究する学問領域。
- 8 パース——アメリカの哲学者(二八三九—一九一四)。
- 9 シミュラクラ現象——三つの点の集まりを人の顔と認識してしまう脳の働き。
- 10 交話的(phatic)——情報伝達を目的としない、人同士の接触を確認する言葉の機能。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

ジュンスイ

- ① 栄枯セイスイを描いた小説
 ② 過去の事例からスイソクする
 ③ 技術のスイを尽くす
 ④ スイチヨク跳びの記録

(イ)

コウソク

- ① 審判の判定にコウギする
 ② 出演のコウシヨウをする
 ③ ささいなことにコウデイする
 ④ コウミヨウな駆け引きをする

(ウ)

リュウセイ

- ① 地面がリュウキする
 ② ジリュウに乗る
 ③ 寺院をコンリュウする
 ④ 健康にリュウイする

(エ)

テイシヨウ

- ① 鉄道ハツシヨウの地
 ② ガツシヨウ団に入る
 ③ ムシヨウで引き受ける
 ④ アンシヨウ番号を設定する

(オ)

ハクメイ

- ① あの人はハクシキな人だ
 ② 勢いにハクシヤをかける
 ③ ハクシンの演技に息を飲む
 ④ 根拠がハクジャクだ

問2 傍線部A「ここでは一人の人間の個性はけっして存在しえない」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6。

- ① 手塚が描くキャラクターは、性別や民族、世代などの属性を組み合わせることで構成されており、任意の人間集団の特徴を体现したものである。
- ② 手塚が描くキャラクターは、デッサンの技術に基づくことなく自己流で描かれており、細部が捨象されて無機質な表現となったものだから。
- ③ 手塚が描くキャラクターは、類型化された要素とその組み合わせから成り立っており、物語を作り出すための道具として用いられたものだから。
- ④ 手塚が描くキャラクターは、象形文字から発想を得た手法で描かれており、驚きや怒りなどの感情を単純な線の集合で表現したものである。
- ⑤ 手塚が描くキャラクターは、細部の具体的な描写の集積によって作られており、どの物語にも登場できるようにパターン化されたものだから。

問3

傍線部B「記号」として設計されたことと、汎世界化は不可分の関係として手塚は理解していたのである。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① まんがが読者の使用言語を問わず消費されていることは、手塚がまんがから個性を除いて人工的な言語に通じる表現を探究した成果であると、筆者は考えているから。
- ② まんがが普遍的な価値を持つようになったことは、手塚が作者としてのこだわりを持たず定型をふまえた登場人物や物語を作り出したことに由来すると、筆者は考えているから。
- ③ まんがが国際的な広がりをもって受容されていることは、手塚が固有の歴史や文化と結びつかないまんが表現を追求したことで無関係ではないと、筆者は考えているから。
- ④ まんがが国籍や民族に関わらず享受されていることは、手塚が作者の特権性を放棄して読者を意識した作品作りを目指したことで関係していると、筆者は考えているから。
- ⑤ まんがが世界的に評価されるジャパニメーションへと発展したことは、手塚が日本独自のものとどまらない新たな表現を工夫した結果であると、筆者は考えているから。

問 4 図 2 の (a) ～ (e) についての説明として **適当でないもの** を次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

8

。

- ① (a) 社会的に認められた約束事さえ共有されていれば、場面や状況に関わらず機能する記号の領域
- ② (b) その場限りの文脈にとどまらないが、同時にそれ自体の具体的なイメージも保持している記号の領域
- ③ (c) 一回的な文脈における直接的接触関係のなかで機能し、人間のコミュニケーション活動を下支えする記号の領域
- ④ (d) 直接的な接触関係が図像や文字といった直観的なメディアの運用を促し、個体を成長させたり文化を進展させたりする方向
- ⑤ (e) 文字を複製する技術からイメージを複製する写真や映画を経て、テレビやデジタル技術へと変化したメディアの発展の方向

問5 傍線部C「〈キャラ〉は、そのような担保から切り離され、指標記号のレベルに接近したものである」とあるが、それはどう

いうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9

。

① ロゴは企業価値の表現という意図に沿って作られた記号であるため、ブランド名と一対となって企業イメージを醸成するが、〈キャラ〉は企業よりも消費者と密接な関係を結ぶため、消費者が既存の企業イメージを更新することができるということ。

② ロゴは固有名を表す文字の要素を洗練させた記号であるため、企業や商品との関係を保持し続けるが、〈キャラ〉はヒトを想起させる形象であるため、それに接した人との間に直接的な関係を生み出し企業や商品とは無関係に発展し得ること。

③ ロゴは文字要素をもとにして造形された記号であるため、特定の言語を共有する社会の内部で影響力を発揮するが、〈キャラ〉は人間的な要素から成り立つ存在であるため、言語的な制約を超えて情報を伝達するための道具として機能すること。

④ ロゴはモノのイメージを文字で表した記号であるため、企業や商品とは別にそれ自体が独立したシンボルとして流通するが、〈キャラ〉はモノのイメージをヒト的に表現したものであるため、企業や商品の価値を実感させつつ流通すること。

⑤ ロゴは理念やイメージを象徴的に示した記号であるため、背景や状況を問わず消費者に同一の情報を伝達することができるが、〈キャラ〉は直接的な接触を通して受容される存在であるため、具体的な場面に即した交流の起点となり得ること。

問6 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後の話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

生徒A — 【文章Ⅰ】では手塚まんがのキャラクターについて、【文章Ⅱ】でも〈キャラ〉について論じられていたね。

生徒B — そうだね。 X。

生徒C — 【文章Ⅰ】の筆者によれば、手塚は言霊的なものに基づく読み手の思い入れを拒んでいたけれど、インタビュアーは手塚のキャラクターに思い入れを抱いていたようだね。

生徒A — この手塚の意図とインタビュアーの反応とのずれについて、どう考えれば良いだろう。

生徒B — 読み手によるキャラクターの受けとめ方について、【文章Ⅱ】の〈キャラ〉の分析を参考に考えてみてはどうか
な。

生徒C — それはいいね。【文章Ⅱ】では、 Y と書かれていたね。

生徒A — そうだね。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を合わせて読んでみると、インタビュアーの反応は、 Z のあらわれと言えるのかもしれないね。

生徒B — キャラクターや〈キャラ〉の特徴について、様々な角度から考えてみるのが大切だね。

(i) 空欄 **X** に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **10**。

- ① **【文章Ⅰ】**では、キャラクターの人工言語的性質に基づく普遍性について述べられていたのに対して、**【文章Ⅱ】**では、〈キャラ〉の指標的性質に基づく自立性について述べられていた
- ② **【文章Ⅰ】**では、キャラクターの言語記号的性質に基づく固有性について述べられていたのに対して、**【文章Ⅱ】**では、〈キャラ〉の類像的性質に基づく自立性について述べられていた
- ③ **【文章Ⅰ】**では、キャラクターの人工言語的性質に基づく固有性について述べられていたのに対して、**【文章Ⅱ】**では、〈キャラ〉の指標的性質に基づく親和性について述べられていた
- ④ **【文章Ⅰ】**では、キャラクターの言語記号的性質に基づく普遍性について述べられていたのに対して、**【文章Ⅱ】**では、〈キャラ〉の類像的性質に基づく親和性について述べられていた

(ii) 空欄

Y

に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

11

。

- ① 人は本能的に〈顔〉の表情を模倣する性質を持っているので、〈顔〉の対象である〈キャラ〉に自らの姿を投影することができる
- ② 〈顔〉にはモノとの関係を断ち切るはたらきがあるので、人は〈顔〉の対象である〈キャラ〉を作品とは無関係に受容してしまふ
- ③ 〈顔〉にはコミュニケーションを活性化させるはたらきがあるので、人は〈顔〉の対象である〈キャラ〉と対話することができる
- ④ 人は無条件に〈顔〉を持つ存在に反応する性質を持っているので、〈顔〉の対象である〈キャラ〉に強く引きつけられてしまふ

(iii) 空欄 Z に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 手塚のキャラクターが、世界の人々に親しまれる個性的な特徴と、戦後まんがに見られる日本固有の文化的な特徴とを合わせ持っていること
- ② 手塚のキャラクターが、記号の組み合わせを通して示された機械的な部分と、読者が愛着を示すことができる人間的な部分とを兼ね備えていること
- ③ 手塚のキャラクターが、特定の文脈を超えて広く流通し得る性質と、受容者がそれぞれの文脈で親しみを抱き得る性質とを兼ね備えていること
- ④ 手塚のキャラクターが、ストーリーを構成する要素としての側面と、作品を代表するものとして受けとめられる側面とを合わせ持っていること

第2問

次の文章は野呂邦暢の「鳥たちの河口」(一九七三年発表)の一節である。放送局のカメラマンを辞めざるをえなくなった

「男」は、退職後、湾岸の河口に通って鳥の観察と撮影を行っていた。あるとき、傷ついた一羽の渡り鳥を見つけ、その後自宅を保護している。これを読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

男は空を見あげた。

5 太陽は依然として雲に隠れている。夜明けから朝をすぎても、男のまわりに漂っている光線はつねに午後のものであった。男は両手をこすり合せた。寒気は朝よりもきびしくなった。漂着物のうちで燃えそうなものはひろいつくしていた。男の目が板小屋にとまった。(もつと早く気がつけば良かった) 足早に板小屋を一巡した。砂丘の前方にノリ養殖場があったところ、見張り番が寝泊りした場所と思われた。養殖場が河口の北に移ってからは見すてられたのだ。潮流が変つてノリがここでは栽培できなくなったのだ。

10 男は小屋の空樽を焚火の方へ運びあげた。頭上にもちあげて投げおろす。タガがゆるんだ。靴で二、三回けると板はばらばらになった。(潮流つてやつはいつかは変わるのだ) こわれた樽を焚火にくべた。こびりついたタールが溶けて刺戟的ないい匂いを放った。火が継続的に燃えることを見とどけておいてカメラにとりついた。

15 水は沖へしりぞきつつあった。レンズでのぞくまでもなくそれがわかった。ココア色の泥が水の下からあらわれ、しだいにその面積を拡大してゆく。水に追われて葦原へにげた鳥たちが群をなして干潟へ舞いもどり、泥の中にひそむ生物をあさり始めた。小エビや貝の肉は鳥の好物なのである。

一羽ずつ望遠レンズの視野におさめて観察した。見なれた鳥である。ひとわたり鳥をしらべ終ると、ふたたびノートに没頭した。Is Now. という日付のページはハイイロヒレアシギを見た記録で埋められていたが、その日、ここを訪れたのはヒレアシギではなかった。湾口で操業する漁船団を望遠レンズで見物するのに夢中になっていたので、その男が近づくの知らなかった。うしろに人の気配がし、声をかけられて初めて気がついた。

「何か見えるかね」

20 五十代の半ばに見えた。以前から会いたかった、といい、マニキュアをした指でタバコをつまみ出してすすめた。その人物は男が勤めていた放送局のある町で、かなり大きい印刷会社を経営していた。局内の印刷物を一手に引きうけていた関係で、何回か顔を合せたことがあるけれど、二人だけで話すのは初めてだった。

「こないだ局へ行つてあなたのことを尋ねたらやめちまったときいたんで少しびっくりしたよ。どんな事情にしろ会社をやめてまで鳥の撮影にうちこむのはちかごろ見上げた生き方だとわたしは思ったな」

A 男は鼻白んだ。会社をやめたのは鳥のためではなかった。しかしそれを説明するのも億劫おっくうだった。

「二、三度お宅にうかがったけれど留守のようで、もつとも毎日ここへ出かけて来てたんなら会えないわけだ」

25 写真集を出したい、と訪問者はいった。それは結構だ、と男は如才あいぢちなく相槌あいつちをうった。

「いや、あなたの写真集を出したいといってるんだよ、わたしは」

B 説明してもらいたい、と男はいった。社長はうむ、といつてカメラをのぞき、干潟かんせつにおりた鳥の群をしばらく黙って観察した。カメラから目を離はなさずに、

「あれはどうもイワミセキレイ(注4)のようだね」

30 男は自分の双眼鏡で確かめ社長の言葉を肯定した。社長は溜息ためいきまじりに、

「イワミセキレイが今じぶんねえ」

このごろの鳥は季節をえらばなくなったのだと男は答えた。

「そうなんだよ、十一月にならないと見られないユリカモメが十月初旬にちらほらしたり、それから一月の白鳥が五月ごろ空を飛ぶのをわたしは見たことがある。なにしろめちやくちやなんだ」

35 「コースをそれる鳥も目立ちますね」

この人物が、「郷土の散歩」というシリーズで放送する十五分のローカル番組に登場して、自分の趣味である鳥の生態観察に

ついで語ったことを思い出した。二年ほど前である。鳥は狂ってるのだ、と社長はいった。

「そしてだれも鳥の世界でおこっている異変に気づかない」

社長は昂奮した。C 砂丘の上を歩きまわりながらしゃべりつづけた。

40 「四、五日前にコウノトリを見たよ」

コウノトリはとつくに絶滅したと思っていた、と男がいうと、十月の季節風によって大陸から渡って来たのだろう、と社長はいった。「どうですか」と社長は干潟をさして、

「ここは鳥にしてみれば地上の樂園だよ、それが五年以内に埋めたてられて石油コンビナートか何かそんなものになっちゃう。渡り鳥もそうなら寄りつかないね。そこでひとつどうですか、ここへやって来る鳥たちの記録写真を一冊くらい残して

45 やつてもいいと思うんだが、天草の羊角湾(注5)ね」

社長はあつちかな、いやこつちの見当かといつて湾口を指した。

「羊角湾を埋めたてて淡水湖にしちまつたらさっぱり鳥が寄りつかなくなったんだそうだ」

かなりネガはたま(注6)まっている、と男はいった。印刷はまかせてくれ、と社長はいった。

「グラビアにはうちとしても自信があるし、取次店にも話をつけるからその点はご心配なく。カラー印刷の機械も入れたばかりでね、新しい機械を」

50 刊行するとしていつごろの予定だろうかと男はきいた。

「そうだな、十二月いっぱいで一応とりだめたネガを整理してもらいたいね。印刷はいつからでもかかれるから」

買う人がいるだろうか、と男は懸念した。

「長期間のうちにぼつぼつ売れたらいいじゃないか。それよりあんたの手間に見合うだけの印税をたっぷり支払えたらいいと思うんだが」

55 男はあわてて印税をあてにしているじゃないこと、それより自分の写真集をもつことができたしあわら倖せだといつた。

「あなたの写真集でもあり鳥たちの写真集でもあるわけだ。鳥と潟海(注7)の記念碑、いや鳥のための墓標というべきだろうか」
社長は湾口に目をそそいだ。つかのま夢みるような表情になって両手をひろげ、二、三步海へむかって歩いた。そこで腕を上
下にゆるく動かした。男は社長が鳥に化身したのではないかと一瞬いぶかった。社長はひろげた両腕で潟海を胸に抱きとるよう
な身ぶりをして、陽気に叫んだ。

「海が埋めたてられても写真集が出来たらその中に鳥も海も生きることになるんだよね」

男はあの日、砂丘の端で社長がしたように両腕を水平にひろげた。——写真集が出来たらその中に鳥も海も生きることになる
んだよね。D なんとという芝居気たつぶりのせりふだったろう、と男はにがにがしく回想した。

65 二回目の会見まで社長はのり気だった。判型や紙質の打合せ(注6)をした。三回目は不在で、四回目には営業部の係長が応対した。
社長から何もきいていないという。噂(注5)によれば新式のカラー印刷用機械を購入したために多額の不渡り(注8)を出して、工場は債権者
団体に差しおさえられているという。よくあることだ、と男は思った。またしても一つの潮流がむきをかえただけのことだ。

70 焚火にくべた木の根は長い間、海中にあつたらしく表面が水と砂の摩擦でなめらかになっていた。樹皮はむけてしまいい肌は色
褪(注4)せて女の腰のように白い。空樽は乾ききつていてタールのこびりついていない部分はほとんど煙もあげず透明な焰(注3)をゆらめか
せた。

男はぼんやりと焚火に目をそそいでいる。火というものは人を夢見心地にするもののように、うずくまって焚火の中心を見ま
もっていると、いつのまにか焰に溶けこみ火と一体になり、心がからつぽになるようである。時間は停止し、永遠そのものであ
るような海のざわめきと葦(注2)のそよしか聞えない。男はしかし眠りこんだのではなかった。時おり火から目を離してカメラをの
ぞいた。潮がひき、露(注1)わになった干潟には見なれた鳥がおり、見なれない鳥もいた。新しい特徴をもった鳥をみつけても、男は
もうシャッターをおさなかつた。望遠レンズでつぶさに観察するにとどめた。

「きょうが終りだ」

ひとりごとをいうのは癖になっていた。砂の上にはさつき計算した数字があった。百日の休暇を自分は有効にすごしたのだ、と思った。(渡りの途中で、鳥も翼を休めるのだから) 水辺に墜落した鳥を思いだした。E 自分は群から脱落した鳥の一羽かもしれぬ。しかしまだ飛ぶことはできる。写真集がふいになったとわかって男は河口へ通うことをやめなかった。初めからそれほど期待はしていなかったのだ。退職金はまだいくらが残っていた。しかしそれも十二月十九日がぎりぎりの日限であった。明日から新しい生活のために都会へ出発することになる。

男はカスピアン・ターンが回復するのをひたすら待ちつづけた。治癒はおそく餌もはかばかしく食べない日があった。ようやく傷は癒え、身動きが活潑かつぱつになった。夜ふけしきりに箱の中でもがいて短い啼なき声をもらすことがあった。これをきよう河口へ運んで放すつもりだったのだ。帰ったら船着場ふなつきばのあたりでも離してやろうと男は考えた。

(注) 1 タガ——樽などにはめて、外側を堅く締め固めるための竹などで作った輪。

2 タール——石炭や木材などを空気に触れさせないで蒸し焼きにしたときにできる、可燃性の黒い液体。

3 ハイイロヒレアシギ——渡り鳥の一種。直後の「ヒレアシギ」も同じ種の鳥を指す。

4 イワミセキレイ——渡り鳥の一種。

5 羊角湾——熊本県天草市にある湾。本作が発表された時期から一九九七年まで干拓事業が行われた。

6 ネガ——ネガフィルムのこと。写真の原板。

7 潟海——遠浅の海岸。

8 不渡り——期限になっても支払いができない手形や小切手のこと。

9 水辺に墜落した鳥——男は以前、墜落した鳥を観察中に目にした。男が保護している鳥とは異なる。

10 カスピアン・ターン——カモメ科の渡り鳥の一種。男が保護している鳥。

問1 傍線部A「男は鼻白んだ。」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 突然現れたあまり親しくない人物が、鳥の観察と撮影についてなれなれしい態度で話しかけてきたから。
- ② 五十代半ばに見える人物が、鳥の観察と撮影に集中している時に邪魔をするように話し出したから。
- ③ 初対面に近い社長が、退職した理由について職場の裏事情を知っているかのように接してきたから。
- ④ 多少面識があつた程度の社長が、自分の生き方まで理解しているかのようなことを言い出したから。
- ⑤ 数回言葉を交わしたにすぎない社長が、放送局にまで押しかけて自分の生活を詮索しようとしたから。

問2 傍線部B「説明してもらいたい、と男はいった。」とあるが、男の反応の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 男は当初、社長が写真集の出版にどの程度本気なのか疑いを持っていたが、強い意志を感じ取り自分も企画に正面から向き合おうとしている。
- ② 男は当初、写真集を出したいという社長に失礼にならない程度に対応していたが、自分の写真集だとわかり企画の内容を詳しく聞こうとしている。
- ③ 男は当初、社長の企画に上辺だけ愛想よく応じていたが、写真集を出す長年の願望が実現しそうだとわかり戸惑いながらも前向きになっている。
- ④ 男は当初、写真集を出版したいという社長の企画に興味はなかったが、自分も関係する話と知って意外に感じながら積極的に説明を求めている。
- ⑤ 男は当初、企画を受け入れる返事を即座にするのをためらっていたが、写真集が刊行される保証を得たと判断し興味を隠しきれないでいる。

問3

傍線部C「砂丘の上を歩きまわりながらしゃべりつつつけた。」とあるが、ここでの社長の行動を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 自然界全体のバランスが壊れてきていることを写真集で訴えたい社長は、時季を外れた渡り鳥の増加についての認識が広く共有されていないことに、いら立った様子を示している。
- ② 干潟と鳥たちを記録した写真集を出版しようとしている社長は、鳥の生態に変化が生じていることが世間で注目されていないことに、冷静ではいられないという様子を示している。
- ③ 干潟が鳥の楽園であることを再認識して鳥の生態系を保護する決意をした社長は、絶滅したと思われたコウノトリが現れたことで、自然保護への使命感に燃える様子を示している。
- ④ 干潟に季節外れの鳥が渡ってきて多様な鳥が見られることに着目した社長は、写真集の企画に賛同してもらおう機会を得たことに、興奮をおさえられないという様子を示している。
- ⑤ 地上の楽園である干潟の鳥の生態を捉えた写真集を出版してその魅力を後世に残したい社長は、鳥に異変が起こっていることに焦り、困惑した思いを抱えている様子を示している。

問 4

傍線部D「なんとという芝居気たつぷりのせりふだったろう、と男はにがにがしく回想した。」とあるが、社長についての男の受け止め方はどのように変化したか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 写真集が人間だけでなく自然のためのものでもあることを説く社長のひたむきさに好感を持ったが、自分の価値観を見せつけているだけだったと捉え直し、社長の主張に同意してしまったことを不愉快に感じている。
- ② 男の写真集を出すことに積極的になってくれる社長の誠意に心ひかれたが、他人の人生に関わる場面でも自分の善意に酔う自己顕示的なふるまいだったと捉え直し、社長の言動に振り回されたことを不愉快に感じている。
- ③ 男と鳥の双方にとつて記念になると言つて写真集の提案をする社長の理念に魅力を感じたが、思つてもいない出まかせを言っているだけだったと捉え直し、社長の姿勢に幻惑されてしまったことを不愉快に感じている。
- ④ 鳥が姿を消しても写真によつてその姿を伝えることができるという社長の前向きな考えに鼓舞されたが、会社の厳しい状況を隠す演技にすぎなかったと捉え直し、社長の焦りに気づけなかったことを不愉快に感じている。
- ⑤ 鳥や地域の自然について鳥のような動きまでしながら強い思い入れをみせて語る社長の姿勢に引き込まれたが、空疎でわざとらしい言動だったと捉え直し、社長の提案に同調してしまったことを不愉快に感じている。

問5 傍線部E「自分は群から脱落した鳥の一羽かもしれぬ。しかしまだ飛ぶことはできる。」とあるが、このときの男の心情の

説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 一人きりで鳥の観察や撮影にふけていることに疎外感を覚えながらも、自分を奮い立たせて、とどまることを知らない渡り鳥のように新しい仕事のために出発しようとしている。
- ② 出発期限の間際まで休暇を取ることに後ろめたさを感じながらも、一時の休息を終えて力を蓄えた鳥が旅立つように、会社に頼ることなく新たな仕事を求めて出発しようとしている。
- ③ 仕事を辞め河口に通う日々を送っていることに挫折感を覚えながらも、傷ついた鳥もやがて回復するように、自分にもまだ活力があることを確かめ新たな生活に向けて出発しようとしている。
- ④ 写真集の企画が頓挫し社会で評価される機会を奪われたことに喪失感を覚えながらも、未練がましく鳥を撮影することをやめ、次の仕事のために新たな土地に向けて出発しようとしている。
- ⑤ 渡り鳥を観察し他人から離れて孤独に生きることにもなしさを覚えながらも、やはり一人で生きる道を求めなければならぬと自分に言い聞かせ、新たな土地に向けて出発しようとしている。

問 6 本文の展開について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) 本文の時間の流れの説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 1行目「男は空を見あげた。」から61行目「生きることになるんだよね」までで社長との関わりがはじまった十一月一日の場面について叙述され、63行目「男はあの日」で都会へ出発する場面に移る。
- ② 7行目「男は小屋の空樽を焚火の方へ運びあげた。」を起点に、十一月一日から養殖場が河口の北に移る以前の日に時間が戻り、68行目「焚火にくべた木の根はくなくなっていた。」で冒頭の時間に戻る。
- ③ 11行目「鳥たちが群をなして干潟へ舞いもどり」という現時点の場面から、干潟で初めて社長と知り合い写真集を作成する話がでてきた場面に時間が移り、63行目「男はあの日」で十一月一日に戻る。
- ④ 13～14行目「ひとわたり鳥をしらべ終ると、ふたたびノートに没頭した。」を契機に、社長に写真集刊行の話を持ちかけられた十一月一日の場面に時間が移り、63行目「男はあの日」で冒頭の時間に戻る。

(ii) 本文の展開において男はどのように描かれているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19。

- ① 男が他者との関わりを通して、人間の本質を受け入れていったことが描かれている。
- ② 男が受動的な考え方に陥って、周囲の状況に埋もれていったことが描かれている。
- ③ 男がこれまでの生き方を悔い、自分が抱える執着を断ち切ったことが描かれている。
- ④ 男が他人の言葉を受けとめ、自然と人間の間関係を再認識したことが描かれている。
- ⑤ 男が経験を振り返り、自分や他人の状況を冷静に捉え直したことが描かれている。

問7 授業で教師から「本文の表現や内容について自分の考えをまとめよう」という課題が出された。提出された二つの文章を読んだ後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【Qさんの文章】

この本文には、「潮流つてやつはいつかは変わるのだ」や「渡りの途中で、鳥も翼を休めるのだから」など、男の心の中が括弧を使って表されている箇所がある。これらの表現は、している。読み手は自然や鳥の描写のなかに、文字通りの意味に加えて比喩的な意味を読み取ることによって、登場人物の心情を理解することができる。

【Rさんの文章】

この本文では、放送局を辞めた男と後に不渡りを出す印刷会社の社長の二人のやりとりが、次第に失われつつある干潟を舞台に繰り広げられている。そして社長は「だれも鳥の世界でおこっている異変に気づかない」や「埋めたてて淡水湖にしちまつたらさっぱり鳥が寄りつかなくなった」など、渡り鳥の変化とともに鳥をめぐる状況の変化についても言及する。このことよって読み手は、登場人物の人生の岐路における葛藤だけではなく、自然環境の問題についても思いを寄せることになる。

(i) 空欄に入るものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 潮流や鳥の変化を説明するとともに、男の人生のうつろいやすさを象徴
- ② 男と社長の人生を説明するとともに、男の社長に対する理解の変化を暗示
- ③ 男と社長の生活を説明するとともに、男自身の自然に共感する姿勢を暗示
- ④ 潮流や鳥の様子を説明するとともに、男自身や男を取り巻く状況を象徴

(ii) 二つの文章の特徴を述べた文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① Qさんの文章は人間と自然に共通のイメージを持つ語を基に表現の特色について述べているのに対して、Rさんの文章は登場人物の会話を基に人間の内面を捉えている点で、Qさんに比べて登場人物の心情を重視した読み方である。
- ② Qさんの文章は多様な文学的表現が用いられていることを捉えて言葉の豊かさについて述べているのに対して、Rさんの文章は虚構世界と現実世界との対比で捉えることで文学の社会性を示していて、Qさんと類似した読み方である。
- ③ Qさんの文章は表現から登場人物の心情を読み取れることを具体例を示して述べているのに対して、Rさんの文章は登場人物の会話を基に本文に含まれる社会の問題を浮かび上がらせていて、ともに根拠を明確にした読み方である。
- ④ Qさんの文章は表現の細部に多様な読み方の可能性があることを述べているのに対して、Rさんの文章は自然と人間を描いた作品の価値について一つの方向を示して社会的に結論づけている点で、Qさんとは対照的な読み方である。

第3問

次の文章は、幸若舞(室町時代の芸能の一つ)『景清』の一節である。平家の残党である景清は、征夷大将軍となった源頼朝の命を狙うも失敗し、身を隠した。そこで、頼朝は景清を見つけ出して捕らえるように命令する。以下は、その続きの場面である。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に [1] ～ [3] の番号を付してある。

(配点 50)

- [1] 清水坂の傍らに、阿古王と申す女、北野詣でをしけるが、京、白川の辻々に立てたる札を讀うでみるに、九年連れたる我が夫の悪七兵衛景清を討たむと書いて立ててあり。阿古王、あまりのものの憂さに、「この札を盗み取り、鴨川、桂川へも a 流さばや」と思ひしが、中にて心を引つ返し、「待てしばし、我が心。日本六十六箇国に、平家の知行とて、国の一所もあらばこそ。平家一味の者とは、夫の景清ばかりなり。包むとすると、このこと遂には洩れて討たれう。景清討たれて、その後には不慮に思ひをせむよりも、九年連れたる情には、二人の若のあるなれば、このこと敵に知らせつつ、景清を討ち取らせ、二人の若を世に立てて、後の榮華に誇らむ」と、思ひすました阿古王が心の内ぞ恐ろしき。
- [2] この札懐中し、六波羅殿へ参り、「札の表に任せて、参りて候ふ」と申し上ぐる。頼朝、なほに思し召し、阿古王を召され、詳しく問はせ給へば、阿古王承り、「さん候ふ。景清が行方を人の知らぬも道理と思し召せ。この間は、尾張の熱田に候ひしが、平家の御代の御時よりも、清水を信仰申し、月に一度は b 参り候ふ。明日は十八日。必ず自らが所へ来たるべし。本より大酒のことなれば、酒を勧むるものならば、前後も知らず伏すべし。その時、自らが参らうざるにて候ふぞ。大勢率し押し寄せ、景清を討ち取らせ、自らに (ア) 所知を賜へ。なう、我が君と申す。頼朝、 (イ) 聞きし召されて、「嬉しう候ふ、阿古王御前。たつて所知をば与ふべし。それぞれと仰せければ、「承る」と申して、砂金三十両、阿古王に下し賜ふ。阿古王、賜り候ひて、清水坂に帰りつつ、その日の暮るるを待ちたるは、情けなうこそ聞こえけれ。
- [3] あら無残や、景清。これをば夢にも知らずして、「明日は十八日。清水へ参らばや」と思ひ、尾州熱田を打つ立つて、四日路の道なるを、その日の暮れほどに、清水坂の傍らなる我が宿所へ立ち寄つて、門ほとほと訪る。内よりも「誰そ」と答ふ

る。「いや、苦しいも候はず。景清なり」とぞ答へける。阿古王、なのめに喜うで、急ぎ立ち出で、門を開き、景清を内へぞ請じける。二人の若どもは、父を **d** 遙かに見慣れねば、父が辺りへ立ち寄つて、睦まじげなる風情なり。阿古王、涙を流す風情にて、「**(イ)** あらいたはしや、景清。平家の御代の御時は、悪七兵衛景清とて、公家にも武家にも憎まれず、一時の詣でにも、**(注7)** 中間、小者はなやかに、馬、鞍、**(注8)** 小具足尋常に、さも **(ウ)** ゆゆしくおはせしが、いつしか平家に過ぎ後れ、精氣玉粹(注9) 果て、御供も無うて、景清は、さこそ苦しくおはすらむ」。構へ置きたることなれば、種々の肴を取り出だし、景清に酒をぞ強ひたりける。景清は見るよりも、いとほしき子どもは並み居たり、酌に立つたるは女房なり、いづくに心か置かるべき。さし受けさし受け飲むほどに、さしにも剛なる景清も、敵のことをばはつたと忘れ、「嬉しう候ふ、阿古王御前。清水へは明日参らうずるにて候ふ。暇申して、**e** さらは」とて、問の障子をざらりと開け、**(注10)** 簾中に移りて、籐の枕に並み寄りて、前後も知らず伏したるは、運の際とぞ聞こえける。

(注)

- 1 清水坂——京都市東山区にある清水寺に至る坂。
- 2 北野詣で——京都市上京区にある北野天満宮への参詣。
- 3 白川——京都の東の郊外。
- 4 六波羅殿——「六波羅」は京都の南東の郊外。当時、源頼朝の邸宅があった。
- 5 尾張の熱田——名古屋市熱田区にある熱田神宮。後出の「尾州熱田」も同じ。
- 6 清水——清水寺。観音菩薩をまつており、毎月十八日が祭礼の日であった。
- 7 中間、小者——奉公人。
- 8 小具足——武装品。
- 9 玉粹——ここでは道中の意味。
- 10 簾中——寝所のこと。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

22

24

(ア) 所知を賜べ

22

- ① 金銀をお貸し下さい
- ② 計略を授けて下さい
- ③ 借金を免除して下さい
- ④ 報酬をお与え下さい
- ⑤ 知らせを送って下さい

(イ) あらいたはしや

23

- ① なんとご無事であったか
- ② たいそう信心深いことだ
- ③ なんとも不快なことだなあ
- ④ 本当に役に立たないことだ
- ⑤ ああ気の毒なことだなあ

(ウ) ゆゆしくおはせしが

24

- ① 立派でいらつしやつたけれど
- ② 不安そうにお出かけになったのを
- ③ みずばらしいご様子に見えて
- ④ 気味悪くお思いであったものの
- ⑤ 厳かにおつしやつたのに

問2 波線部 a ～ e について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番

号は 25。

- ① a 「流さばや」の「ばや」は「～してほしい」という意の願望の終助詞で、誰かが札を流すことを願う阿古王の心情を表している。
- ② b 「参り候ふ」の「候ふ」は丁寧語で、景清から清水寺の観音菩薩への敬意を示し、景清の清水寺への信仰心の厚さを表している。
- ③ c 「聞こし召されて」は尊敬語の「聞こす」「召す」が頼朝の動作を示し、頼朝が話を聞いて阿古王を呼び寄せる様子を表している。
- ④ d 「遥かに見慣れねば」の「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形で、子どもたちが久しく父景清に会っていないことを表している。
- ⑤ e 「さらば」の「さら」は動詞「去る」の未然形で、ここを離れたら二度とは家族のもとに戻らないという景清の決意を表している。

問3 二重傍線部「思ひすました」とあるが、このときの阿古王の考えはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、

次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

26

。

- ① 景清をかくまってもいつかは見つかってしまうので、子どもたちの将来のためにも、景清の居場所を頼朝に知らせてしまおうという考え。
- ② 景清が亡くなったとしても、自分には土地があり経済的に問題がないので、子どもたちと安心して暮らすことを第一の目的にしようという考え。
- ③ 景清が討たれた際には、自分も同罪とされる危険があるので、頼朝に景清と子どもたちとを売り渡し、先んじて身の安全をはかろうという考え。
- ④ 景清が頼朝を討つことははやかなわないので、子どもたちに景清を討たせて、自分たちが潔白であることを頼朝に示そうという考え。

問 4

3

27

3 段落における景清についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

① 景清は、清水寺へ参詣するために、通常なら四日かかる熱田からの距離を一日で移動し、十八日の夕方に清水坂の阿古王のもとを訪れた。

② 景清は、かわいい子どもたちが側に寄ってくるのを見て、妻子を守ることと敵を討つことのどちらを優先すべきか、自分でもわからなくなった。

③ 景清は、家族と過ごせるひとときを喜び、阿古王に勧められるがまま大いに酒を飲むうちに、頼朝の存在も忘れるほど気を緩めてしまった。

④ 景清は、阿古王が用意した酒を飲み過ぎ、翌日の清水寺への参詣を取りやめたので、観音の怒りに触れてしまい命運が尽きることになった。

問5

Mさんのクラスでは本文を学んだ後、本文と同じく景清を題材にした浄瑠璃『出世景清』があることを学習した。次に示す文章は、本文の[1]段落に対応する『出世景清』の一節で(本文の「阿古屋」は「阿古屋」として登場)、「ワークシート」は、Mさんがこれを授業で読んで考察した内容を記し、教師に提出したものである。これらを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

ここに阿古屋が一腹(注1)の兄伊庭十蔵(注2)は、北野詣(注3)でをしたりしが、大息(注4)ついて我が家に帰り、妹の阿古屋をかたはらに招き、「これを見よ、まことに果報は寝て待てとや。悪七兵衛景清を討つてなりとも搦めてなりとも参らせたるもの

ならば、勲功は望み次第との御制札を立てられたり。我等が栄華の瑞相(注5)この時とおぼえたり。兵衛はいづくにありけるぞ。はや六波羅へ訴へて、一かど御恩にあづからん。いかにいかに」と仰せける。阿古屋はしばし返事もせず、涙にく

れてゐたりしが、「なう兄上、そもや御身は本氣にてのたまふか、ただしは狂氣し給ふかや。わらはが夫(注6)にて候へば、御身のためには妹婿、この子は甥(注7)にて候はずや。平家の御代にて候はば、誰かあらう景清と、飛ぶ鳥までも落ちし身が、今この御代にて候へばこそ、数ならぬ我々を頼みて御入り候ふものを。たとへば日本に唐(注8)をそへて賜(注9)るとて、そもや訴人(注10)がなるべきか。飛鳥(注11)懐(注12)に入る時は狩人も助くるとよ。昨日までも今朝までも、隔てぬ仲をそもやそも退(注13)かれうものか。さりとは、人は一代名は末代、思ひわけても御覽せよ」と、泣(注14)いつ、口説(注15)いつ、止めける。

(注) 1 一腹——同腹。母を同じくすること。

3 瑞相——吉兆。

5 一かど——特別な。

2 搦めて——捕らえて。

4 兵衛——景清のこと。

6 訴人——人を訴え出ること。

『出世景清』について ※『出世景清』は江戸時代に近松門左衛門が著した浄瑠璃作品。

○『景清』(1)段落と比較をしてみよう

『景清』との共通点	『景清』との相違点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 景清の身柄を六波羅へ差し出すよう命じた札が立てられている。 ・ 立て札の内容を知った景清の妻の反応が描かれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 『景清』には存在しなかった景清の妻の兄十蔵が新たに登場する。 ・ 『景清』では阿古王が一人で考えて次の行動を決断するが、『出世景清』では景清への対応をめぐる阿古屋と兄十蔵が対立する。 <p>十蔵と阿古屋の会話の内容をまとめると、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-left: 20px;">X</div> <p style="margin-left: 20px;">←</p>

○比較して考えたことをまとめよう

『出世景清』の作者は『景清』と共通した枠組みを用いつつ、十蔵という新たな登場人物を加えている。その理由は、

Y

からだと言えるだろう。

教師のコメント

丁寧に比較することで読みが深まりましたね。『出世景清』はまだまだ話が続きます。この後、阿古屋と十蔵がどうなるか、ぜひ最後まで読んでみて下さい。

(i) 空欄 **X** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **28**。

- ① 十蔵が「景清を六波羅に差し出せば我が家の名誉は高まるだろう。この機会を逃したら家を再興することはできない」と言ったのに対し、阿古屋は「飛ぶ鳥を落とす勢いであった平家の時代は昔のことなのだから、我が家が落ちぶれてしまったのも仕方がない」と言っている
- ② 十蔵が「立て札には、景清を生け捕りにしないと、その親族も罰せられると書いてある。早く景清を見つけないといけない」と言ったのに対し、阿古屋は「あなたから見て景清は大切な家族であり、忠誠を誓った主君でもある。それなのに景清を裏切るつもりなのか」と言っている
- ③ 十蔵が「北野天満宮に参詣していたおかげで、景清を捕らえる機会がめぐってきた。これで我が一族の繁栄が得られる」と言ったのに対し、阿古屋は「日本でも中国でも、夫を裏切るような非情な人はおらず、そのようなことをすれば末代までの恥になる」と言っている
- ④ 十蔵が「我々にも運が向いてきた。景清をさっさと頼朝に売り渡し、恩恵にあずかろう」と言ったのに対し、阿古屋は「平家の全盛期には並ぶ者もない勢いであった景清だが、今や取るに足りない我々を頼りにしている。そのような人を裏切ることはできない」と言っている

(ii) 空欄 Y に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 阿古王に備わっていた現実的で打算的な側面を十蔵に移すことによって、夫である景清を一心に救おうとする阿古屋を描き出そうとした
- ② 権力に追従する阿古王の卑屈な一面を十蔵に移すことによって、地位や名誉を捨てても家族への愛を失わない阿古屋を描き出そうとした
- ③ 北野詣でを欠かさない阿古王の信心深い性格を十蔵に移すことによって、神仏に逆らっても意志を貫こうとする阿古屋を描き出そうとした
- ④ 立て札を最初に確認するという阿古王が担った役割を十蔵に移すことによって、兄がもたらす情報に一喜一憂する阿古屋を描き出そうとした

第4問

次の文章は、明代末期から清代初期の思想家である賀貽孫が著したものである。これを読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

禿翁好大者也。其言曰、「余家泉海。海魚入港、潮退而不

能去也。集数百人、持斧斤、升梯登鱼背、斫割、连数百石、鱼

故无害。须臾潮至、翻身摇尾、悠然而逝。以为鱼之大者、莫

过此矣。豪傑之士亦若是鱼而已矣。」

嗟乎、禿翁則誠豪傑也。然徒知豪傑之能为大、而不知

聖賢之能不为大也。不觀之童乎。及其化也、时为人焉、时

为虫焉、时飘为叶焉、时擲为梭焉。彼自有所以为大、为小、

为卷舒者、而人乃以区区小大之形、瑣瑣卷舒之状、求

之。^C 是豈知竜之為竜哉。秃翁惟其欲^レ為^ニ泉海之魚。^(ウ) 是以^レ櫻^レ禍^ニ而不^レ寧。^D 使^ニ秃翁不^レ為^レ魚而為^レ竜、世人安得^レ而禍^レ之也哉。

(賀貽孫『激書』による)

(注)

- 1 秃翁——明代の思想家である李贄(一五二七—一六〇二)の号。李贄は、文筆活動が原因で迫害を受け獄死した。
- 2 泉海——福建省泉州とそこに面した海。
- 3 港——入り江。
- 4 斧斤——おの。
- 5 斫割——切り取る。
- 6 石——容積の単位。
- 7 須臾——短い時間。
- 8 聖賢——優れた徳をそなえた人物。
- 9 梭——機織りに用いる楕円形の小型の道具。小さくてすばやく動くという特徴から、ゆらゆらとたたよう小さな葉に対置されている。
- 10 為^レ卷為^レ舒——「卷」はとぐろを巻いてわだかまったさま、「舒」はとぐろをほどいて体をのばしたさま。
- 11 区区——小さくて取るに足りない。後に出てくる「瑣瑣」も同じ。

問1 波線部ア「不能去也」・イ「莫過此矣」・ウ「是以」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 30 へ、32 へ。

ア 「不能去也」

- 30
- ① 離れることができなかった
 ② 追い払わざるをえなかった
 ③ 見捨てざるをえなかった
 ④ 離れるはずがなかった
 ⑤ 追い払うことができなかった

イ 「莫過此矣」

- 31
- ① ここで時を費やすことはない
 ② これ以前に現れたことはない
 ③ この程度のものではない
 ④ これ以上のものはない
 ⑤ ここを通ることではない

ウ 「是以」

- 32
- ① この状況において
 ② これに関して
 ③ この手段によって
 ④ これ以後は
 ⑤ これが原因で

問2 傍線部A「豪傑之士亦若是魚而已矣。」とあるが、禿翁の考える「豪傑之士」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 抜きん出た存在であるにもかかわらず、苦境に陥ってしまうこともあるが、自己の抱く理想を断固として貫くことができる人物。
- ② 抜きん出た存在であるにもかかわらず、実力を発揮し得ない状況に置かれてしまうこともあるが、そうした不遇に奮起して研鑽けんさんを積む人物。
- ③ 抜きん出た存在であるがゆえに、多数派から激しい批判を浴びることもあるが、それに対して臆おくすることなく堂々と反論できる人物。
- ④ 抜きん出た存在であるがゆえに、周囲の人々から奇異の目で見られることもあるが、毅然きぜんとした態度によって人々を徐々に心服させる人物。
- ⑤ 抜きん出た存在であるがゆえに、思うに任せない状況に陥って人々から攻撃されることもあるが、超然として意に介さずのびやかに生きる人物。

問 3 傍線部 B「不_レ觀_ニ之_一竜_ニ乎。」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 聖賢のあり方は、竜のあり方に見てとることはできない。
- ② 聖賢のあり方は、竜のあり方と見分けがつくだろうか。
- ③ 聖賢のあり方は、竜のあり方と見分けがつくに違いない。
- ④ 聖賢のあり方は、竜のあり方に見てとれるではないか。
- ⑤ 聖賢のあり方は、竜のあり方と見分けなくてはならない。

問 4 二重傍線部 I「彼」、II「人」はそれぞれ何を指しているか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① I 聖賢 II 平凡な人々
- ② I 大魚 II 秃翁
- ③ I 竜 II 平凡な人々
- ④ I 聖賢 II 秃翁
- ⑤ I 竜 II 筆者

問5 傍線部C「是豈知竜之為竜哉。」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の

①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 是豈知_レ竜_ニ之_ヲ為_レ竜_ニ哉。 是れ豈に竜の之れ竜の為にするを知らんや。
- ② 是豈知_レ竜_ニ之_ヲ為_レ竜_ニ哉。 是れ豈に竜を知るは之れ竜たらんや。
- ③ 是豈知_レ竜_ニ之_ヲ為_レ竜_ニ哉。 是れ豈に竜の竜たるを知らんや。
- ④ 是豈知_レ竜_ニ之_ヲ為_レ竜_ニ哉。 是れ豈に竜の為_ナすことを知るの竜ならんや。
- ⑤ 是豈知_レ竜_ニ之_ヲ為_レ竜_ニ哉。 是れ豈に竜を知るの竜の為_ナらんや。

問6 傍線部D「使_レ秃翁_ニ不_レ為_レ魚_ニ而_レ為_レ竜_ニ世人安得_レ而_レ禍_レ之_ニ也哉。」の解釈として最も適当なものを、次の①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 秃翁は大魚ではなく、竜であったがゆえに、世の人々は秃翁に危害を加えずにはいらなかった。
- ② 秃翁が大魚ではなく、竜であったならば、世の人々は秃翁に危害を加えることはできなかったはずだ。
- ③ 秃翁が大魚であつて、竜ではなかったならば、世の人々は秃翁を受け入れて危害を加えなかったはずだ。
- ④ 秃翁は大魚でも竜でもなかったがゆえに、世の人々は懼_ハることなく秃翁に危害を加えることができた。
- ⑤ 秃翁が大魚ではなく、竜であつたとしても、世の人々は秃翁を受け入れることなく危害を加えたはずだ。

問7 筆者は、禿翁をどのように論評しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 38。

- ① 禿翁は、雄大であることを好み、実際に雄大さを体現して生きたが、一定したあり方にとらわれない自在な境地を知ることがなかった。
- ② 禿翁は、一定したあり方にとらわれない自在な境地を目指したが、その境地に到達できず、ひたすらに雄大であるだけにとどまった。
- ③ 禿翁は、雄大であることを好んだが、雄大さを体現して生きることができず、一定したあり方にとらわれない自在な境地を新たに模索した。
- ④ 禿翁は、一定したあり方にとらわれない自在な境地を目指し、雄大さだけをひたすらに追求するような生き方は眼中になかった。
- ⑤ 禿翁は、雄大であることを好むだけでなく、一定したあり方にとらわれない自在な生き方にもあこがれていたが、どちらの境地にも到達できなかった。